

# GRADE

2008.03  
No.006

冬・春号

“グラツエ”とはイタリア語で“ありがとう”的意味。陽気なラテン民族の言葉に倣って、素直に感謝の言葉を口にできる明るい場作りを、本学科は心がけています。

## 特 集 2007年度に海の向こうへ渡った学生たちが得たものは?

国際コミュニケーション学科から様々な国・地域へ飛び立って行った学生達が日本に戻り、それぞれの体験をレポートにして今年も報告書を作成しました。以下がその抜粋。短い一文にそれぞれの学生らの濃い体験が、きゅっと詰まっていますね。

### 【驚きと発見】

- ◆僕のステイ先は小型風車で自家発電をし、それがなくなるとディーゼル発電機を使っていた。ある日発電機が壊れ、電子レンジなど電力消費の激しいものは全く使えなくなり、夜部屋の明かりはロウソクだけという日々を過ごした。(ニュージーランド)
- ◆家庭内エコが徹底しており、自分達の食事の残飯はミミズと豚にまわすようになっており、ミミズは肥料から野菜を育てる土へ、豚は家畜からソーセージへ、見事な家庭内エコシステムができていた。(ニュージーランド)
- ◆街を歩いていると、Jambo!という元気の良い声が見知らぬ人からもかかった。『貧困』という厳しい現実と戦っているとは思えない明るさが漂っていてびっくりした。(タンザニア)
- ◆「日本のヘアスタイルはちょんまげなのか?」とか「死ぬ時は腹を切るの?」と聞かれて驚いた。ヨーロッパの人たちは特に“神風”をよく知っていた。(チェコ)
- ◆朝夕はマフラーとコートが必要なのに、昼間はTシャツ一枚でOKという、極めて寒暖の差が激しい気候は日本ではおよそ体験できないものだった。(オーストラリア)
- ◆お店がびっくりするほど早く閉まるが、その分家族との時間を大切にしていた。(ニュージーランド)
- ◆夕飯を夫婦一緒に手際良く作ってくれるところを見、家庭での夫婦の役割が日本と違うと感じた。(中国)
- ◆日本の教科書には戦争特有の殺戮の表現や拷問など残酷な場面についてはなるべく避けられるように書かれているのに対し、中国ではそういうことにもたくさんのページを割かれて記述されていた。(中国)

- ◆ロンドンの競馬場は日本のものとは違い、芝生が青々としていて、コースも楕円形ではなく、三角形に近い形をしていた。さらにレースがある日はみな観客が正装をしていた。(英国)
- ◆海外から集まった留学生のほとんどが将来の仕事に対する明確な目的意識を持っていたことにちょっと驚いた。(米国)
- ◆教師が学生に“教える”のではなく、学生同士で授業を盛り上げ高めていくというやり方が米国では主流だった。先生はあくまでも補助的役割に徹していた。(米国)
- ◆アジア圏からの学生はおとなしく、教師が書いたことをノートに写す作業がメインだが、アジア圏以外の学生はノートに書くよりまず聞くという行動に集中しているように見えた。(米国)

### 【現地の様子】

- ◆格差による問題の大きさを感じた。家計を支えるために学校に通えず無邪気に働く子供たちが多い事に衝撃を受けた。(タンザニア)
- ◆遠回しな言い方や少し控えめな性格的人が多いところが日本に似ているなど感じた(イギリス)
- ◆黄土高原のトウモロコシは膝丈しかなく、ジャガイモも育ちが悪く葉の間から土が見えていた。それは地球が深刻な水不足と砂漠化が進んでいることを物語っていた。(中国)
- ◆ニュージーランドの公園は人と自然の共存が生活の一部として体系づけられている感じがあり、家族連れが異常に多かった。(ニュージーランド)
- ◆米国南部の人種差別について日本でいろいろ勉強していたのだが、現地の人々は想定していたよりもずっと温かいと感じた。(米国)





### 【苦労したこと】

- ◆10国籍の17人で日本人は私一人。共同生活なので協調性が求められ、どんなことにも対応できる柔軟性を求められた。(チェコ)
- ◆最初は現地の人々と話すことが怖かったのだが、大学の先生方がつたない英語を丁寧に聞いてくれたことが自信につながった。(オーストラリア)
- ◆留学が始まってからの二週間はストレスで腹痛が続いた。それを相談しようと思っても英語力が低過ぎてコミュニケーションが図れず、辛かった。(イギリス)
- ◆挨拶の時にお辞儀ではなく、手にキスされたりハグされたり。頭では理解できるのだが、体が違和感を感じて困った。(チェコ)
- ◆お風呂は一人5分から10分と決められていてシャワーだけだったので、寒い冬場は体を洗うのも一苦労だった(オーストラリア)

### 【海の向こうから見えた日本】

- ◆資源の再利用が徹底している国と比べると、日本は資源の無駄遣いが多い。(ニュージーランド)
- ◆大学で法律を勉強したいから自分でバイトしてお金を貯めているという若者に出会い、日本の同世代が随分甘いものに思えた。(タンザニア)
- ◆自分の国のことを持てて話す同世代に出逢い、もっと日本のこと勉強しておくべきだったと後悔した。(タンザニア)
- ◆「日本人はなぜはっきりとノーを言わないのか」また「日本人はカメラが好きだよね」などと活動を共にした仲間たちに指摘され、初めて自分が無意識でしていた行為(自分の文化)を意識した。(チェコ)
- ◆一緒にになったボランティア仲間のうち数人は、私以上に日本の漫画について詳しく知っており、特にスペイン人と韓国人が際立っていて、ドラえもんのテーマソングを歌っていた。(チェコ)
- ◆乾き切った黄土高原を目の当たりにして、日本の緑豊かな環境は当たり前のこと再確認した。(中国)
- ◆他国の学生と比較すると、いかに日本の学生が講義に積極的でないかということが語学学習授業の中で浮き彫りになっていた。(米国)

### 【現地でしたこと】

- ◆森があった山肌のほとんどの木を伐採、牧場地として利用したため、洪水や地滑りが多くなるという現象が起きていた。だから僕たちはそんな土地に植林をした。(ニュージーランド)
- ◆黄土高原ではアンズの木が貴重な収入源になることを知り、地元の人の経済活動に貢献できるよう、果樹園の一部にアンズの木を植えてきた。(中国)
- ◆カンガルーやコアラを見たり、美しい海で泳いだりした。(オーストラリア)
- ◆休日にはインテリアデザイナーの手伝いをしていた。(イギリス)
- ◆本場のハロウィンやクリスマスを体験した。(アメリカ)

### 【現地の人のこんなところがスゴいと思った】

- ◆環境への意識の高さは半端ではなかった。(ニュージーランド)
- ◆疑問があればすぐに率直に先生にぶつけるヨーロッパ人留学生の積極性に感心した。(米国)
- ◆Money has no meaning, the most important thing is kindness (“お金”は、“親切”ほど重要度が高くない)ということ、たまたま出逢った女性が言っていた。最初私達に近寄ってきた彼女に、お金目的かと疑った自分がちょっと恥ずかしかった。(タンザニア)
- ◆一緒に授業を受けた現地の学生は基本的に私語なく、積極的に発言、途中退室が全くなかった。勉学に対する熱心さが全く違っていた。(中国)

### 【収穫】

- ◆勉強はするものではなくさせられるものという甘い考えが、この経験を機に払拭できたかもしれないと思った。(中国)
- ◆見聞きしたいろんな出来事は、複雑に絡まり合っていて、『これは○○だ』と一概に括ってしまうことはできないと思った。私達の日常でもモノの見方は無限通りがあるんだなと思った。(タンザニア)
- ◆ロシア人の子と共同生活をしてボイフレンドの事で悩んでいる話を聞いた時、やっぱり彼女も人間なんだなと思って安心した。(チェコ)
- ◆留学を経験して自分なりの英語学習の方法や学ぶ楽しさを発見できたので、以前に増して大学での授業が楽しくなった。語学感覚を忘れないように積極的に英語の授業で発言している。(オーストラリア)
- ◆受け身で何かを待っていても何も起こらない。常に自分からという積極性が海外の舞台では必要だということを学んだ。(ニュージーランド)
- ◆ピーターパンの作者が小説以外の現実世界でも子ども達に夢を与えていることを現地で知り、自分もそんな人になりたいと思うようになった。(英國)
- ◆様々な国からの留学生に柔軟に対応する先生達の寛容性に触れ、自分がこれからどういう英語教師になろうかというアイディアが行く前よりも固まった。(米国)



経験を豊かな財産に変えた学生たち。  
どんな形であろうとも、それらが実りある将来につながっていくといいですね。

## こんなこと、やりました！ 9月▶3月編

### 卒業生による座談会に、現役学生の真剣な眼差し

11月10日(土)、第23回明星英米語学文学会が行われました。一番の目的は学科の卒業生、教員、現役学生らの世代を越えた交流。第一部が卒業生による座談会、第二部が現役学生による研究発表、第三部は学習院大学教授・中野春夫氏の講演会という進行で、当日は一般の方も含め、およそ30名の方にお集り頂きました。

中でも関心が高かったのは、卒業生による座談会。進路に悩む現役学生からの質問が飛び交いました。Aさんは卒業後、歯科技工士になるために専門学校で勉強中。「せっかく大学で学んだ英語は生かされるのですか?」との問い合わせに「医療の世界では英単語が頻繁に使われていますし、最近は外国人の患者さんも増えていますから、ぜひ、日常の中そのもので既に役立っています」。出版関係の仕事に就きたいという現役学生へは、通

販会社でカタログ作りをしている卒業生のBさんからこんなアドバイスも。「出版の仕事を希望しているからといって、アプローチ先は出版社だけではありません。一般企業でも広報など出版に近い仕事もあります。ですから、出版と一口に言っても、“編集”“執筆”“デザイン”など、どの業種をしたいのかまずそれを見極め、その業種を募集している会社を選ぶという方法もあります」とあります。

このイベントを企画した住本先生は最後にこう括った。「本学科は国際コミュニケーションを学ぶ学科ですが、その内容をどう生かしていくかはその人次第。固定観念をはずせば、就職の道も無限に広がっているということを卒業生が教えてくれた気がします」

### 本学科の村上那由他くん、中国語スピーチコンテストで優勝

11月17日(土)、明星大学の全学生を対象に、第二回目中国語スピーチコンテストが行われました。このコンテストは本学科の有志で立ち上げられた明星ちやいにーず俱楽部が主催、中国語を学習している学生なら、本学科に限らず誰もが参加できるという企画。中国語人口が増える現代社会を象徴するように、意欲溢れる学生らが、コンテストにのぞみました。

一部は、暗唱部門。そして二部がスピーチ部門。ここで学科の二年生村上那由他くんが優勝を勝ち取りました。村上くんは07年度夏、重慶の西南大学で二週間のフィールドワークを体験、そこでの体験を中国語で披露しました。

「僕は中国に対してあまりいい印象がなかったのですが、実際に現地に

行って初めて、その固定観念が消えました。まさに百聞は一見にしかず。学科のプログラムに参加したことで中国の同世代の仲間たちと交流が持てたことがなにより嬉しかったです」。努力が報われたことを喜ぶ村上くん。「都市部と農村部の経済格差はかなり深刻なものでした。来年は西南大学に半年の留学に行きます。このチャンスにさらに中国に対する理解を深めて現地の人々と友好関係を築き、中国と日本の架け橋になれたらいなと思ってます」。

賞品は電子辞書。「これは……さらにいいプレッシャーがかかりますね」。村上くんは賞品を受け取り、照れくさそうに笑った。



### これから就職活動に役立つOB/OG就職懇談会開催

12月19日(水)、進路をこれから決めようとする三年生に向か、既に就職を済ませたOB/OGが自分の経験を後輩に伝えるという就職懇談会が行われました。この企画は、なるべく年齢の近い先輩の役立つ話を後輩に聞かせてあげる機会を作りたいという毛利先生の熱意により実現したもの。当団はおよそ60名近い三年生らが集まりました。

やはり先輩の生の話は後輩達の心にも響いたらしく、「卒業生先輩方のリアルな話を初めて伺ったので新鮮だった」「企業の良い点だけでなくマイナス面や苦労した話が聞けたのは有意義だった」「良い刺激になった。自分の就職活動を見直そうと思った」「人事部の担当者がどのような点を重視し

ているのか聞く事ができたので、参考になった」等々の感想が、開催後、寄せられました。

担当した毛利先生は「本当に実現して良かったです。これからも毎年、この企画は続けていきたいと思います。何より、学生からもらう感想が一番の励みになりますから」とコメント。「学科でこのような機会を設けて下さると安心します。本当に貴重な機会でした」「就職課で得られる情報とはまた違う視点の情報が得られるので、定期的に開催して欲しいです」。以上のような感想を踏まえ、学科では学生らの良質な就職を精一杯応援できるよう、早くも次年度の就職懇談会の開催に向けて動き出しています。



二宮公博さん、竹上アシさん、上田康弘さん

Miss.R

本学科の映画好き女子学生Miss.Rが、  
名画の中のワンフレーズ英語を抜粋、解説します。

## の『ワンフレーズ映画日記』

“Together before make the end by enemy

= ならば、敵の刀で死のう”

勝本(渡辺謙)が「自分の刀か敵の刀か、最期まで刀にあって死にたい」と言ったのに対し、アルグレン(トム・クルーズ)が上のワンフレーズで答えた。武士道を学び侍の心や人々のやさしさに触れ、何が大切かを知ったアルグレンが、この国で勝本と共に死ぬことを選んだ。それは、顔や言葉が違っても一緒に過ごすことで互いの良さを知り、国や敵という隔たりも越えることができるという証明をしたすばらしい言葉だ。

偏見は誰にでもある厄介な特質。けれどそれは単に側面から見ようとするから。そのものに真剣に向き合おうとすれば、側面だけでなく内面を知ることができる。自分の考えに囚われずに視野を広げれば、見えなかった何かが、きっと見えてくるはず。それは、「自分」ではなく「世界で生きる自分」と「外人」ではなく「同じ世界で生きる人」、つまりアルグレンの精神のように…。

## 学科の愉快な仲間たち【教員編】

教養深く、学生思いで、個性的な、本学科の教員たち。授業の中だけではなかなか触れられないその素顔を、前号から4回に渡ってお伝えします。(もっと詳しい記事が見たい方は、明星大学の学科ホームページを御覧下さい)



●田中宏昌  
企業内の英語教育

企業内英語教育の分野では、常に需要をしっかり見つめて相手を徹底分析、それに合わせた形の供給を行うという超実践型の企業コンサルティングで、これまでにも数多くの会社の業績アップのお手伝いをしてきた田中先生。「物事は全てケースバイケースで、全部に当てはまる手法なんてのは絶対にありません。だからボクは、その場その場で対応策をちゃんと自分で考えられる、そんな人間の育成に力を入れています。」

「“仕事ができる人”が“ビジネス英語”もできなくちゃいけない、日本がそんな風に変わってきた。日本国内が相手だとトップセールスマンなのに、相手が海外になった瞬間、モノを売ることができなくなる。その原因を洗い出して、企業内の英語教育カリキュラムを組み直し、売り上げに貢献するのが僕の仕事です。」1998年から受け持ってきたNHK教育テレビの番組“英語ビジネスワールド”的脚本作り&講義も、ケーススタディからのアプローチがとても分かり易いとの評価を受け、およそ3年間続けられた。

本学科では主に、英語教育の方法論の指導にあたっている。「ボクが最も大切にしているのは“Communicative”な言語教育です。英語が世の中で実際にどのように使われているのかの状況を作つてあげることが、一番の英語教育だと考えています。」ゼミの学生はこう言う。「先生の授業には、“こうしなさい”とか“こうだよ”っていうのがないんです。例だけ示してくれて、“こうやるとこういう結果になるけど、ところで君はどうする?”と。だからいつも“自分の力”を意識させられるんです。」

相手の自主性を重んじる田中先生は、厳しい時は厳しいけれど、学生想いだとやっぱりの評判だ。



●岩下俊治  
パソコンの英語教育への活用

文系出身の先生が多い本学科において、異色の存在とも言えるのが岩下先生。学生時代は環境アセスメントに関する仕事をしたいと、工学部海洋土木開発工学科に所属。卒業後に就職した会社でも、理系研究職を担当していた。そんな先生に転機が訪れたのが20代後半。「子ども達に環境を教えてみたい」という気持ちが湧いてきてね。そして学生時代に所属していた英会話研究部の顧問の先生に連絡、27歳という年齢でなんと英文科の学生としてやり直すことになった。二度目の大学卒業後は高校の英語教師に。それでも先生のほとばしるエネルギーは留まることなく、33歳で大学院に入学した。修士から博士へ進んだ頃にはもう37歳。そこからの就職活動をスタートさせ、現職についた。

先生の専門は“生成文法”。言葉を科学的に論理立てて考え、そのメカニズムを解明するという学問で、歴史はまだ50年と新しい。「言葉をメッセージを伝える道具と考えるなら、車に例えることができます。英文学が車で何を運んでいるかを研究する学問だとすると、生成文法は車そのもののメカニックを研究する学問。違うものを寄せ集めて、そこにどんな共通ルールがあるかを論理的にひも解いて行く学問なので、これから英語の教員を目指す人にとっては、目から鱗の教授法ですよ！」

中学高校の現場でもまだ採用している先生が少ないと言われる生成文法に基づいた英語教授法。「それがいつか主流になるまで私は頑張ります」。理系出身の岩下先生は、言葉という文学ツールを合理的に解析することに挑戦している。

## Wanted

### 学生編集スタッフ募集中!

将来マスコミの仕事をしたい人、またはイラストなどで自己表現をしたい人、記事を書きたい人など常時募集中。企画段階から実際に形にしていくまで、全てを自分で体験できるので、とてもやりがいがありますよ。積極的な参加をお待ちしています。

### これは是非載せて欲しい!の記事&情報大募集

“GRAZIE”は、学生のみなさんと作っていくメディアです。より充実した内容にしていくために、どんな些細なことでもネタをお待ちしています。

[応募先] 〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1 明星大学国際コミュニケーション学科  
Tel 042-591-5329 またはinfo-com@eleal.meisei-u.ac.jpまで

### 「編集スタッフの呟き」

今年もまた海外フィールドワークや留学を終えた学生さん達が体験談をまとめた報告書作りに関わらせてもらつた。現場での活き活きとした表情が文面から垣間みられる瞬間が仕事をしていて一番楽しい。さて来年度はどうなるかな。